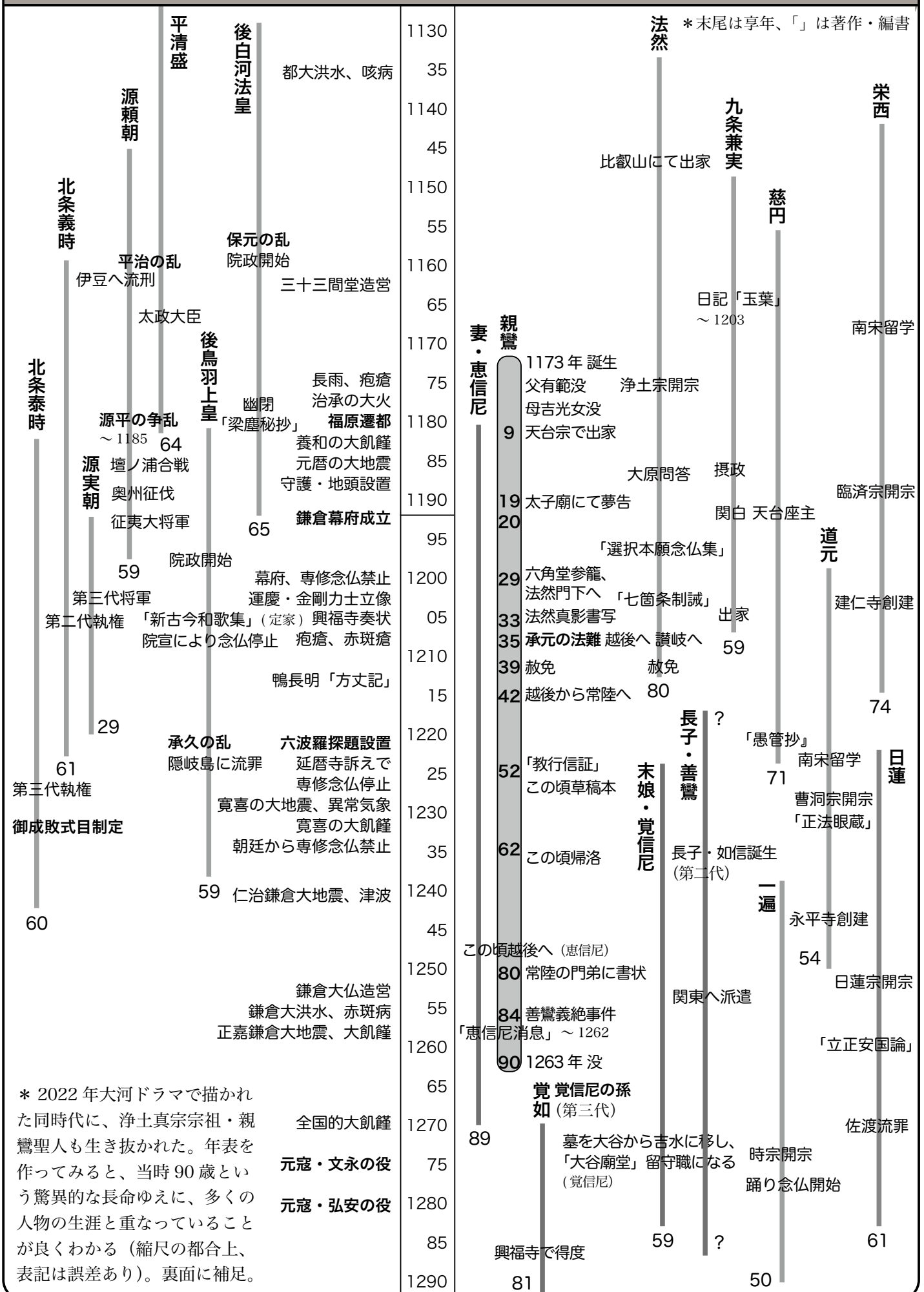


平安末期～鎌倉初期 『親鸞聖人と18人 (ほんとはもっという)』 関連年表



\* 2022年大河ドラマで描かれた同時代に、浄土真宗宗祖・親鸞聖人も生き抜かれた。年表を作ってみると、当時90歳という驚異的な長命ゆえに、多くの人物の生涯と重なっていることが良くわかる(縮尺の都合上、表記は誤差あり)。裏面に補足。

12世紀後半～13世紀、各地で災害や飢饉・疫病など天変地異が頻出。餓死など都も荒廃し、末法思想・浄土信仰が広まり民は救済を求めた。硬直化した公家政治から武家へ（朝廷から幕府へ）と、さまざまな乱を経て統治機構も転換。元号も数年おきに改元され、親鸞在世の期間には36回（その内災異改元は20回ほど）も行われた。

■鎌倉時代に入ると、戦乱によって台頭した新興の武士や庶民の需要に応え、国家安泰や学問・自力修行を目指す仏教を超えて、在世に苦しむ人びとの救済を目的とした新興の宗派が続々と生まれた。

武士達から特に信仰を集めていたのが、中国から新しく入ってきた臨済宗、曹洞宗など「禅宗」だ。念仏や題目を唱えることで救いが得られるとする「浄土宗」や「日蓮宗」、阿弥陀仏の他力を説いた「浄土真宗」とは違い、禅宗は自身の力や鍛錬によって悟りの境地にたどり着くことができるとしたことから、武士の闘争的で実直な気風に受け入れられたと考えられる。

鎌倉幕府が、朝廷との結び付きが強い旧仏教を迎えなかったため、旧仏教から弾圧を受けていた臨済宗も、源頼朝の妻・北条政子や、2代将軍・源頼家が帰依。曹洞宗やその他の鎌倉仏教は、下級武士や庶民達の間で広がった。

■これら鎌倉初期の新仏教は、奈良・比叡山など旧仏教から弾圧を受けていた。

1207年（承元元年）、後鳥羽上皇が熊野に参詣している最中、寵愛していた女官と法然聖人の弟子が密通し出家させてしまう。激怒した後鳥羽上皇は、浄土宗の繁栄を妬む天台宗、真言宗などの諸宗からの訴えもあり、ついに浄土宗の解散、念仏布教の禁止令が出される。法然聖人の土佐への流罪、弟子四名の死罪と親鸞を含む七名の流罪となった（承元の法難）。日蓮も強硬な活動で、伊豆や佐渡への流罪を経験している。

当時、僧侶は俗人として刑に処せられ、死刑という

のは異例だった。親鸞聖人も初めは死刑だったのが、法然聖人の信奉者で元関白・九条兼実の計らいで越後に流刑となった。親鸞聖人が著書で強く非難したのは、これらは正規の手続きでなく、上皇による私刑だったとみる説もある。

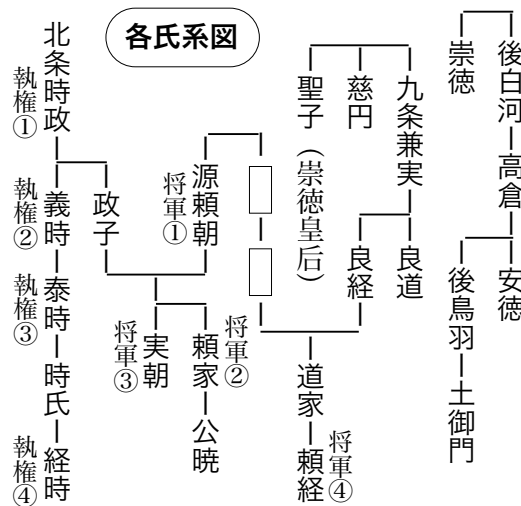
■1219年三代将軍・源実朝らが暗殺され、鎌倉の混乱を好機と見た後鳥羽上皇は朝廷の復権をめざし、1221年諸国の武士を集め、執権・北条義時追討の「院宣」を発した。

この挙兵には、後鳥羽上皇を警護する「北面の武士」「西面の武士」に加えて西国の武士らが集まったが、幕府はそれをはるかに上回る東国御家人を動員し、朝廷軍は大敗。上皇の膨大な荘園は没収され、隠岐島へ配流となり、再び京へは戻れなかった。

上皇は世の無常を感じたのか、交流のあった法然上人の弟子・聖覚法印から阿弥陀仏の本願を聞き、浄土往生を願うようになった。最期の著作『無常講式』の一部は蓮如上人「白骨の御文章」に引用されている。

この「承久の乱」のあと、義時の子・泰時は朝廷を監視する六波羅探題を京都に設置。これにより幕府の優位は決定的になり、この関係性は明治維新まで600年以上続くことになる。承久の乱は公

武の権力が転換し、武家政権による支配が本格化した日本史のターニングポイントと言える。（参考 <https://www.touken-world.jp/tips/78659/> 「親鸞をめぐる人々」今井雅春 ほか）



●親鸞は中流貴族・日野家の一員、日野有範の長男として誕生。父も母・吉光女も生没年不詳。叔父・日野範綱が養父となり青蓮院の住持・慈円を戒師にして出家。後白河法皇の近臣である範綱が、敵対する平家打倒の「鹿ヶ谷の陰謀」（未遂）に関わって処分を受け、その類が及ばぬようにしたとか、他の兄弟も出家したとか諸説ある。

●覚信尼は父親鸞の又従兄弟・日野広綱との間に覚恵をもうけ、その長男・覚如は「報恩講私記」、「親鸞伝絵」など多くの著作を著し、法然の正統な後継たる親鸞を主張。本願寺の寺院化に尽力し、教団の基礎を築いた。

●平家滅亡を見ていた公家九条兼実（九条家始祖）は頼朝と手を結び、後白河法皇が亡くなると頼朝の征夷大將軍宣下も取り計らうが後に政権を追われる。長男・良道が若死にし、次男・良経（摂政）が専修念仏問題の渦中に急死。法然より戒を受けられるなど親交が深く、「選択本願念仏集」の著作を勧めた。晩年、出家後に詠んだ和歌は、現在の浄土宗の宗歌になっている。娘・玉日は親鸞に嫁いだとされるが不詳。

●北条泰時は執権の強化と合議制をもって鎌倉幕府を安定化させ、武士の成文法・御成敗式目では「神社仏閣を大事にせよ」と記した。親鸞を越後から常陸国に招いたといわれる宇都宮頼綱の妻は泰時の叔母であり、長男・時氏（若くして病没）は京都六波羅探題在職中の一切経校合事業（校正監修）に親鸞を招聘したとされている。

人物模様あれこれ